建造物

長楽館の室内意匠と家具について

千木良　礼子

はじめに

この度、長楽館の建物及び家具の調査をする機会を得たので、これまでの既に判明している事柄や、刊行物などを取りまとめ、新しい知見を交えて報告する。長楽館は昭和61年（1986）に京都市指定有形文化財として建物と家具（附）が指定されている。建物に関しては、『京都市の文化財―京都市指定・登録文化財第四集―』（1987）において報告されている。

1　長楽館の概要と年表

長楽館に関わる年表を表１にまとめた。長楽館は明治38年（1905）に起工、同40年（1907）に上棟（棟札）、同42年（1909）に竣工している。

工期は、京都府の工事カード整理台帳、及び清水組（現清水建設）の工事経歴書に記される（※この資料は昭和61年の指定時に収集されたと思われる写しであるが、原本の所在は未確認である。）。

竣工時の写真は、アルバムがある。このアルバムは施主の村井吉兵衛（1864～1926）から多数の人に手紙と共に送られたと思われる。『藤井善助伝続編』（p.112）には村井から藤井善助に宛てた手紙の記載があり、長楽館の竣工のことと、アルバムを送ることが認められる。また別の宛名の手紙も確認できた（長楽館にはその手紙の写しが保管されている。）。

大正３年（1914）には３階の改修を行っており、現在の上段の間が造作した。

大正６年（1917）頃には喫烟室を中国風の部屋に改修した。

大正11年（1922）頃にはエレベーターを設置した。

2　史料について

主な史料として、拙稿「長楽館の家具調度品について」（京都市文化財保護課紀要第７号）において、以下の３点を紹介している。

- 『京都圓山　長楽館　村井別邸　THE CHORAKKAN, MR.MURAI' S VILLA, MARUYAMA PARK KYOTO.』（以下「竣工アルバム」とする。長楽館蔵）（写真1-1）
- 「村井家京都別邸平面図」（以下「大正期の図面」、内海氏蔵）（写真1-2）
- 「長楽館／什器備品台帳／永田町／村井家」（以下「備品台帳」、内海氏蔵）（写真1-3）

また、棟札は、小屋裏で、当初と３階改造時の２点確認した。

当初棟札（小屋組に取付け）（写真1-4）

表１．長楽館に関する年表

時期	西暦	内容	典拠
M31.5.4	1898	津田氏（京都市上京区）より土地購入	登記簿
M37.12	1904	長楽館建設にとりかかる	大渓（1964）
M38.11-M42.6	1905-1909	" 村井別邸新築工事長楽館 煉瓦造　工事全 123,548 円 67"	京都府「工事カード整理台帳」（台帳番号 56）
M38.11.30-M42.6.25	1905-1909	「村井別邸　煉瓦造」99,824 円	「工事経歴書　合資会社　清水組京都支店」
M40.6.9	1907	長楽館の上棟	棟札
M 43.1	1910	竣工アルバムを送付	村井吉兵衛手紙（『藤井善助伝　続編』p.112）
T2.2.13-17	1913	御大典に向け宿泊先の視察	『大正大禮京都府記事庶務之部　上』（1917）
T3.1.10-T3.12.31	1914	「村井別邸三階洋館改造工事 木造」24,042 円	「工事経歴書　合資会社　清水組京都支店」
T4	1915	三階改造竣工記事	「建築工芸叢誌第２期 14」T4.8.15
T5.1.1	1916	妻宇野子死去	大渓（1964）p.313
T6.1.17	1917	日野薫子と再婚	大渓（1964）p.313
T6 頃	1917 頃	喫烟室を支那室に改装、龍の天井画貼り付け	長尾（1936）pp.7-8,27
T10.1.4	1921	村井吉兵衛左足切断手術	村井（1935）p.55
T11.6.22	1922	村井御別邸昇降機改造工事見積書（荒木建築事務所）	個人所有史料
T11 以降	1922 以降	「荒木建築事務所平面図」	個人所有史料
T15.1.2	1926	村井吉兵衛死去	大渓（1964）p.314
S2.3.22	1927	村井銀行閉鎖	大渓（1964）p.314
S3.12.14	1928	明和不動産（株）購入	登記簿
S12.10.5	1937	財団法人藤井斎成会購入	登記簿
S20.12.28	1945	岡田氏（芦屋市）購入	登記簿
S2 1 頃	1946 頃	GHQ 接収	「連合軍接収物件関係」（註 1）
S29.3.31	1954	土手富三が土地・建物を購入し、（株）ホテル長楽館を設立	登記簿、長楽館 HP
		その後改装（京都工芸繊維大学野口茂教授が参加）	野口（1978）20 号
S60	1985	家具調査	（有）小泉和子生活史研究所
S61	1986	市指定有形文化財建造物に指定	
H 14	2002	土手個人所有より（株）長楽館所有へ	

最大高1370mm、最大幅250mm、
最小幅200mm、肩部高1345mm、
厚22mm
（表）奉上棟　村井吉兵衛
監督技師　米国人　ガ―ディナー
ガ―ディナー事務所主任　荒木賢治
請負人　清水満之助
監督　辰野勇記
現場主任　小野武雄
現場係　上林敬吉
清水方主任　北田保次郎
現場主任　杉山茂太
（裏）　維　時明治四十年六月九日

改変時棟札（小屋組に、構造材に係るボルトで取付け）（写真1-5）

最大高850mm、最大幅230mm、最小幅165mm、肩部高820mm、厚18mm。杉材と思われる。裏面は、構造材と一緒にボルト留めされており、未確認である。

（表）奉上棟　村井吉兵衛
長楽館参階／日本間増築
技師　大島盈株
請負人　清水満之助
執事　上林晴吉
清水方主任　浅井長次郎
現場主任　　鍋田鍵三郎
現場監督　　野口健一
高津市太郎
大工頭梁　　新井金次郎

また、小屋裏には当初と思われる建具が一部保管されていた。建具の片面は部屋にあわせてペンキを塗り、ホール側と思われる面は、旧三重県庁にあるような木目塗が施されている。

このほかの史料は、各部屋の説明でその都度記述する。

3　各部屋の室内意匠

本稿における各部屋の表記については、現在の平面に近い状態である大正期の図面に記載される室名で統一した。各項目には、「竣工時（竣工アルバム）／大正期の図面／什器備品台帳／現在」の順に、各資料での部屋名を記載した。また、家具については、前掲拙稿「長楽館の家具調度品について」における表1「家具の一覧」の新番号を付した。

1階　廣間（Hall）／廣間／広間／現ロビー（写真2-1～7）

床は寄木造りで上に絨毯を敷く。

柱は、壁際に角柱、広間中央に円柱を立てる。柱はエンタシスで、柱頭はイオニア式に、古典装飾の花綱紋様（Festoon、フェストゥーン）が施される。材は暖炉と同じ蛇紋岩に見える。

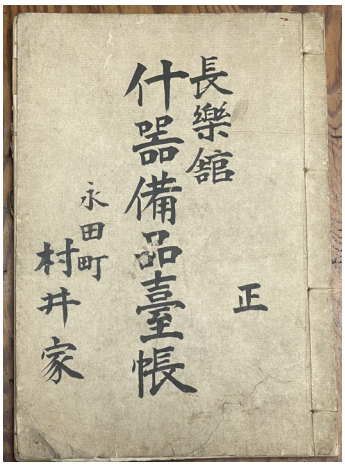
壁は漆喰（プラスター）仕上げ。

天井は天井高が4025mmと高く、ケヤキの化粧梁を用い、ルネサンス風にまとめる。

南面中央に暖炉を設け、両側に長椅子と彫刻台を置く。暖炉の裏側は花卉室の中央に位置する。北面中央には下り階段があり、球戯室へ続く。

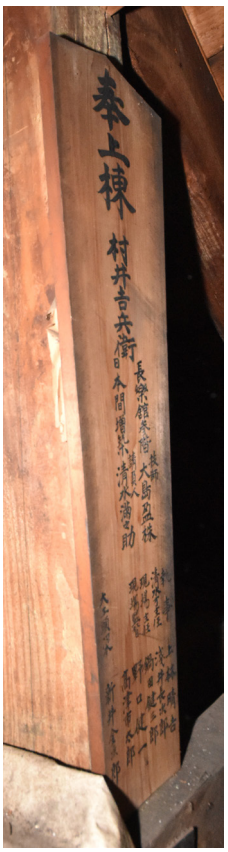
照明について、玄関から入った廊下には卵型のシャンデリアが付く。上部の笠は蜜柑状のカット、下部は大粒カットガラスで、内部に茄子型の電球を3灯吊るす。広

1-1 竣工アルバム表紙（長楽館蔵）

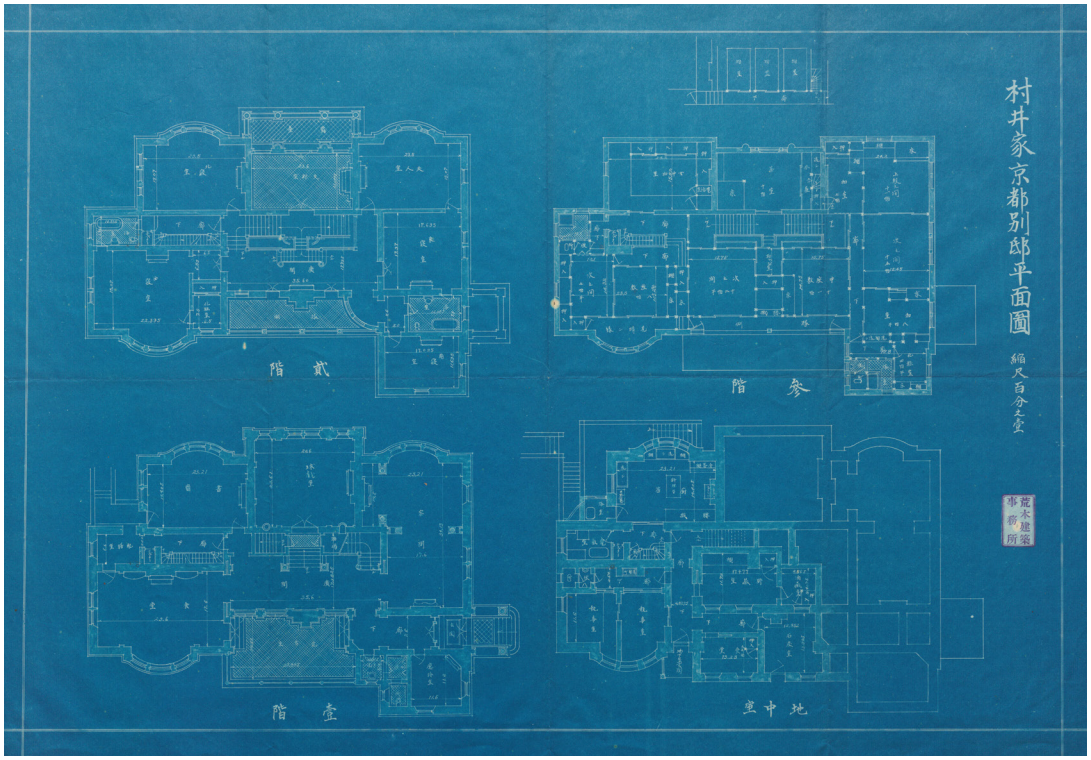


1-3 什器備品台帳表紙（内海氏蔵）

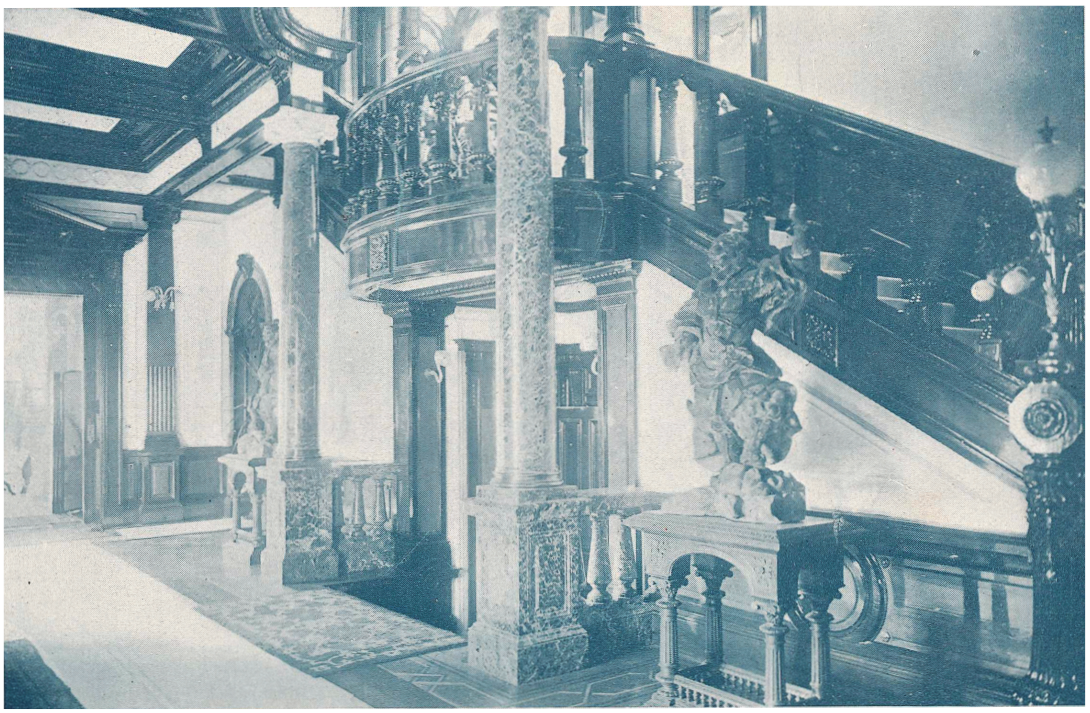
1-4 棟札（新築）



1-5 棟札（増築）



1-2 平面図（内海氏蔵）



2-1「廣間」（竣工アルバム）

2-2広間（大正５～７年）（長楽館蔵）

2-3 広間南面

2-4 玄関

2-5 広間

2-6 広間壁灯

2-7 広間暖炉

間のシャンデリアは２基あるが、竣工アルバムでは確認できない。西側のシャンデリアは隣室の書斎から移設されたもの、東側のシャンデリアは１階の旧応接室、又は2階の旧南寝室より移設したと伝わる。壁灯はシェードが花蕾型で全面が摺地に透明磨きのパターンがある。アームはガラスで、カットガラスの花綱飾と透明ガラスの風鈴型装飾がつく。シェードは客間のシャンデリアと同じ形状である。階段親柱上にも照明が付く。シェードは後補のもの。支柱はブロンズで、四方に唐草が伸び、先端に電球が付く。

暖炉（写真2-7）は柱と同じ蛇紋岩で上部に大鏡を載せる。両側の片蓋装飾柱には縦溝装飾が施される。柱頭部分はモディリオンを形どる。火袋周囲の飾金物は上部が透金物、左右が浮彫装飾で、その技術は精巧である。大鏡の枠は全て欅材である。

家具は、玄関を入ってすぐ右手にルネサンス風の帽子掛（長42）がある。帽子掛の左右にはステッキ入れがある。南面に連なる長椅子（長19、20）は、国産で杉田商店のものと考えられ、ルネサンス風に仕上げられている。

玄関入口のステンドグラスは一部が花弁室に移設されており、同じデザインのものを新しく嵌めている。

部屋全体はルネサンス風に仕上げており、当時の雰囲気がよく残されている。

１階　客間（Drawing Room）／客間／パーラ／現迎賓の間（写真3-1～13）

長楽館における主要な部屋の一つである。竣工アルバムのキャプションや、当時の新聞記事を見ると、明治42年（1909）頃は部屋名称が定まっていないように見受けられるが、用途としては談話室のような扱いと推測される（※竣工アルバムでは「Drawing Room 客間」、明治42年（1909）8月刊行『グラヒック』では「The parlour 大談話室」と記載されている。）。

床は竣工アルバムでは板敷きに絨毯が敷かれているが、後世に絨毯に張り替えられた。

柱は大理石でローマのコンポジット式オーダを模し華やかである。柱は室内の垂れ壁を支える。壁際は角柱で、室内側は円柱である。柱頭はアカンサスと渦巻き文様が施される。柱上部から天井までの小壁、エンタブラチュア（Entablature）は、曲線の繰型を持ち、中央に草花紋様のレリーフを配している。

壁は額縁式の繊細で華やかな枠飾で装飾される。また、壁面の上部には楕円形の世界各国の都市風景の絵画が嵌められ、全部で12枚ある。描いたのは高木背水（誠一）である（熊川1939）。画題は、「日本・東京、皇居二重橋」「中国・北京か審陽の天壇」「アメリカ・ニューヨーク、自由の女神」「ミャンマー・パゴダ」「エジプト・カイロの廃墟とピラミッド」「スイス・ローザンヌの湖」「イギリス・ケンブリッジ」「ロシア・モスクワ、クレムリン付近」「イタリア・ヴェネツィア、政庁」「フランス・パリ、ベルサイユ宮殿の庭園」「ドイツ・ポツダム、サンスーシ宮殿」などである（野口1979）。高木背水は村井吉兵衛の母の肖像を描いたのを機に、信頼関係を築くようになった。世界名所十二景を描くことは、「仕事は割合に簡単であった。大部分が外

国名画のコピーだった」そうである（直木1937）。竣工アルバムでは「ニューヨークの自由の女神」が嵌められる箇所に、現在は「スイス・ローザンヌの湖」が嵌められており、また竣工より後と思われる写真3-13では壁画がないため、一度外され、位置が変更されている。

天井は、高さが4031mm、小壁で３室に分けられ、円を中心にして草花文様のレリーフを施す。

照明について、天井は８灯のシャンデリアが吊るされる（写真3-8）。シェードは広間と同形の花蕾型、アームはガラス、花綱模様やペンダントは大粒の多面カットガラスで、本館の最も豪華なシャンデリアの一つである（野口1979）。アルバム写真より竣工時のものと推定される。メンテナンス時にバカラ社製であることが分かった（『長楽未央』2013Vol.20）。

暖炉脇の壁灯は３灯式で、シェードはシャンデリアと同形である（写真3-9）。優婉なガラスのアーム、花綱飾やペンダントはカットガラスである。１階広間暖炉脇の２灯と同形である。

暖炉は２基あって、白大理石で暖炉上部にはロココ風枠飾りに大鏡が嵌められている（写真3-10・11）。暖炉は中央よりシンメトリーに渦巻が波状に伸び、流麗な曲線を描いており、両側はアカンサスの葉飾りがS字状の柱型をなしている。火袋への枠飾金物は精密な技術で古典の草花紋様が表現されている。また床上の仕切金物には懸華紋が表現され、石造・金工共に高い格調を示している（野口1978、20号）。

開口部には、半円型の出窓三連窓にカーテンバランスが付く。カーテンバランス上部にある帯状の枠飾は、ロココ風で、中央に豊麗な草花を配し、シンメトリーにロココ特有の流動曲線の枠を展開している。その中間の草花のレリーフや両端の装飾には金彩を施し、繊細な優雅さを示している。カーテン生地は後補である。

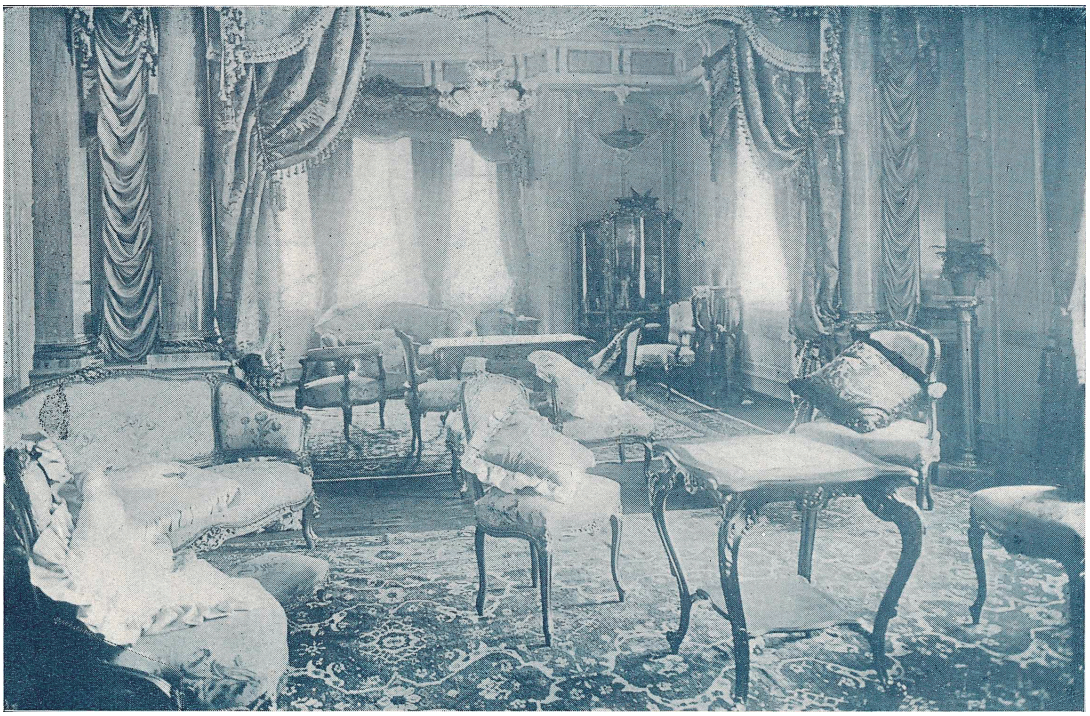
家具はチーク材の輸入品で室内に合わせてロココ調にまとめている。

竣工アルバム（写真3-1）には多くの家具が写る。左最手前に袖付小椅子（長７）、左手前に長椅子と足置き台（長9）、右手前に小テーブルとその周りに小椅子と肘掛椅子（長6、8、24）、奥の部屋には左にS字椅子ヵ（長5）、最奥に長椅子（長3）と角テーブル（長23）が写る。

袖付小椅子（長７）は裂地が後に張り替えられている。背面の補強のため背枠より座枠に支木が延びている。背面支持はあまり考慮されず、後脚は比較的垂直であって反りが少ない。座面は前幅が広く、弓型で奥行は狭く、ロココ様式の特色を示している。

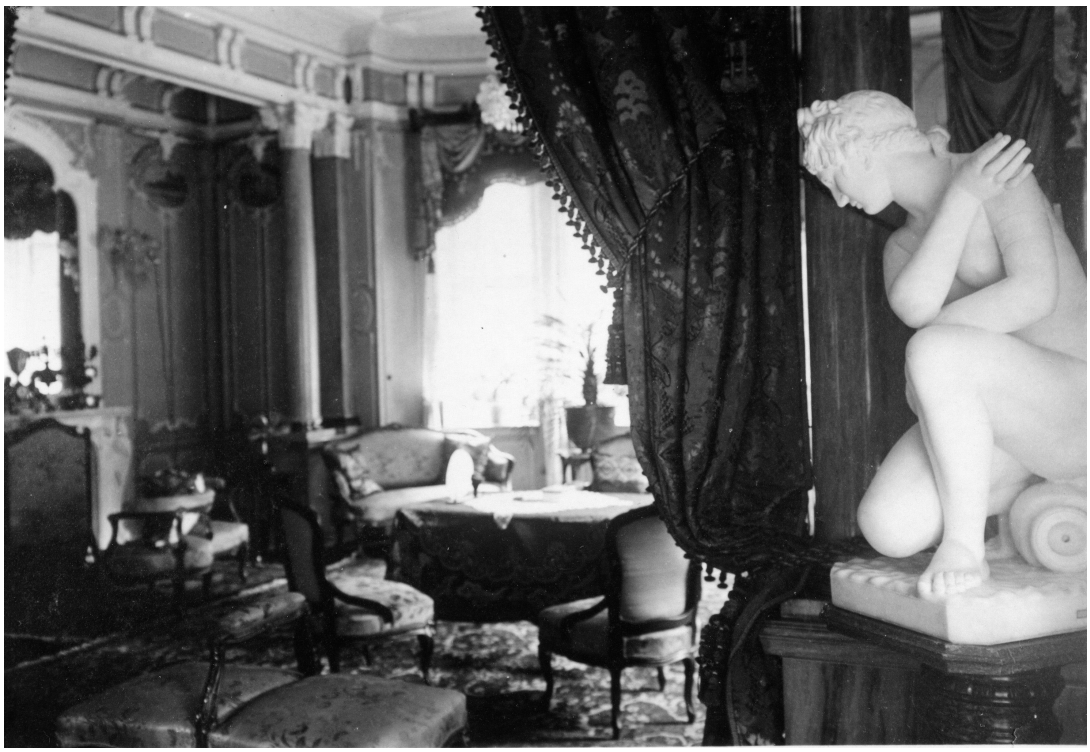
長椅子は、カナッペ（Canape）と呼ばれ、他の椅子同様、全体が流れるような曲線で形造られ、座る人を包み込むような感じを抱かせる。

肘掛椅子は、典型的なロココ様式の椅子でフォテーユ（feuteuil）と呼ばれ、肘にはクッションがつく。全体に流れるような豊かな曲線の木枠で輪郭され、木枠には細い線状と草花の浮彫彫刻が施されている。前足は弾力に満ちた猫足で軽快瀟洒である。肘は後退し、肘内寸法が広い。裂地は後に張り替えられている。背枠や座枠はシンメ



3-1「客間」（竣工アルバム）

3-2客間（大正５～７年）（長楽館蔵）



3-3客間（大正５～７年）（長楽館蔵）

3-4「大談話室　The parlour」『グラヒック第１巻第14号』（1909）（©国立国会図書館）

3-5客間北をみる（長楽館蔵）

3-6客間北西をみる

3-7客間天井

3-8客間天井照明

3-9客間暖炉脇の壁灯

3-10客間南面暖炉

3-11客間西面暖炉

3-12客間半円型の出窓三連窓にみられるカーテンバランス

3-13客間古写真（内海氏蔵）

トリーを尊重せず自由である。当時の椅子類は壁面に沿って配置される慣例から、背面については考慮が必要なく、従って元々は布地が張られていない（家具詳細は野口1978、20号）。

竣工アルバムと比較すると、床、壁の色、カーテン以外はほぼ当時の状態がよく残っている。写真3-13の古写真では、カーテンがなく、壁画も白地に見える。家具が異なり、竣工より後の時代にみえる。一度壁画が外された時期があると推測される。

室内は、エンタブレチュアの幅がやや狭く、天井が低いところから、本来のスケールよりは小さく納まるが、全体としては優美な曲線が多くみられ、19世紀ロココ様式を造作しようとしている。一時期家具の移動やカーテンの取り外しがあったものの、現在は竣工時の家具を修理して一部新しい家具を補充しながら飲食の営業として利用されている。カーテンも古写真を元に復元を試みており、当時のロココ調の雰囲気が再現されている。

1階　温室（Conservatory）／花卉室／温室／現BOUTIQUE（写真4-1～8）

床タイルは竣工アルバムより当初材である。また竣工アルバムには植物が写るが、植物のない古写真（写真4-3）もあり、こちらの方が竣工直後の写真の可能性がある。

室内は、当初は南面を採光部とし、上部をアールにしたガラス張りであった。このうち南東部については、腰煉瓦壁とガラス窓を一部撤去し、増築している。現在アール部はプラスター仕上げとし、側面のみガラス窓を設けている。南東部の煉瓦壁は切断面が確認でき、当初の煉瓦が確認できる。

壁について、玄関から続く開き戸周辺の壁タイル（東面）は、竣工アルバムと配置が異なるため、後補である。天井のアール上部を支える位置に付け柱がある。角柱で、ややエンタシスのようなふくらみがみられる。材は人研ぎ石に見える。柱の右側（南側）の壁は当初は煉瓦積にみえるが、現在は外国の風景をモチーフにした石がはめられている。左側（北側）にみえる煉瓦様の柱は、広間にある暖炉の裏側にあたる。

西面南側は中央にステンドグラスを嵌め、周囲にはオレンジ色のガラスブロックで壁面を構成する。写真4-5はガラス窓であるため、後世にステンドグラスを移設している。このステンドグラスは、モチーフのバラ図を幾何学的に抽象形成している（写真4-7）。1階便所や、1階球戯室のステンドグラスとよく似たモチーフである。周囲の橙色の光壁（ガラスブロック）も後世のもの（昭和43年〈1968〉頃）だが、白い木部とのバランスがよい。

西面北側は、食堂に続く両開き戸があり、ステンドグラスが嵌る。このステンドグラスは、当初は玄関の建具についていたものを後世（1986年以前）に移設したものである。文様はカキツバタであり、玄関の建具脇にも同様のモチーフがあるため、当初は4枚のステンドグラスが玄関に並んでいた。玄関はカキツバタ文様のガラス窓を復元している。

天井は応接室と同じ仕様。輸入金属製打出天井板張りに白ペンキを塗ったものである。この金属製打出天井板は、東京の建築

4-1「温室」東面（竣工アルバム）

4-2花卉室東面

4-3花卉室東面　村井（右）と男性（内海氏蔵）

4-4花卉室西面（長楽館蔵）

4-5花卉室西面　村井と薫子夫人　大正6年（1917）（内海氏蔵）

4-6花卉室西面「温室内の主人夫妻」
『グラヒック第1巻第13号』（1909）
（©国立国会図書館）

4-7花卉室バラ図のステンドグラス

4-8花卉室カキツバタのステンドグラス

資材輸入販売元であった藤原商店によるものである（工藤2014）。

照明は竣工アルバムより後補である。

家具について、古写真からは当時のものは不明で、現存の家具を見ても花卉室用の家具は想定できない。

花卉室は、東西の壁面や南面のガラス張、ステンドグラスの位置などが変更されているが、床タイルや天井はそのまま現存しており、当時の面影もよく残っている。

1階　食堂（Dining Room）／食堂／食堂／現LE CHENE（写真5-1～10）

床は寄木張で、竣工アルバムと同じであることから当初である。

柱は角柱とし付け柱を立てる。柱上部から天井までのエンタブラチュアを直線と四角形でまとめる。

柱上の小壁は、方形の枠の中に草花のパターンが浮彫されている。その上にモディヨン（軒下飾り）をのせ、天井を支える意匠となっている。

壁は直線的で、柱との間に額縁を設ける。

天井は化粧格天井で、ネオ・バロック風の装飾彫刻が施される。

中央にシャンデリアが吊るされる（写真5-9）。竣工アルバムより当初である。天井の吊元より３段で構成され、円錐形で、下段は球状をなしている。カバーはカットガラスで、上部より下部になるに従って粒とカットは大きくなり、最下部に縦長のペンダントを束ねている。下段の金属枠より放射状にアームが伸び、蝋燭の照明が付いている。客間のシャンデリアが曲線で広がり、蕾型のライトが付いた優しい雰囲気に対し、数珠上のカットガラスで構成されていて豪華である。

暖炉脇の壁灯は、２灯でシェードはなく、カットガラスの数珠繋ぎタイプである。アームは優美な曲線のガラスである。

また、四隅に半円球状の照明が取り付けられている（写真5-8）。カバーは小粒のカットガラスを数珠状に繋げて半円球状にする。現在の３階上段の間の天井照明と同じである。近年にバカラ社の関係者による来訪があり、バカラ社製であることが判明したという（『長楽未央』2013Vol.20）。３階上段の間は村井によって大正３年（1914）に増築された部屋であることから、この照明は大正３年以降のものとも考えられる。

室内中央には暖炉（写真5-10）、左右にコンソールテーブル（写真5-11）、いずれの上部にも大きな鏡が嵌められている。

暖炉は大理石を使う。上部中央に長方形の枠飾りを付け、その中に貝と葉のレリーフ、枠飾りはモディリオン風の支えで受けている。左右の柱は、上段は方形、下段はS字曲線を描いている。下段の上方にはアカンサスの葉、その下にはザクロ様の果実が垂れる。客間の曲線の多いロココ調の暖炉に比べれば、全体として直線的なネオ・バロック風の意匠としてまとまっている。そこにS字曲線を設けることで、堅すぎない印象を与えている。

コンソールテーブルは、大理石を用い、曲線状の天板を持ち送りで支える。柱はイオニア式にし、暖炉に比べてシンプルな形にしている。

カーテンの上飾は木製で、中央に盃形の

5-1「食堂」（竣工アルバム）

5-2 食堂（大正５～７年）（長楽館蔵）

5-3 食堂（内海氏蔵）

5-4 食堂　天井隅に半球の照明が写る（内海氏蔵）

5-5 食堂　変更されたカーテンバランス（内海氏蔵）

5-6 食堂　写真 5-5 と同日撮影（内海氏蔵）

5-7 食堂　西をみる（長楽館蔵）

5-8 食堂天井四隅の照明

5-9 食堂シャンデリア（長楽館蔵）

5-10 食堂暖炉

5-11 食堂コンソールテーブル

鉢を配して果物を載せ、それを中心に古典装飾の花綱装飾（フェストゥーン）を用いている。

この部屋の古写真は、竣工アルバムの他に5点（写真5-2～6）確認している。写真5-4は、天井隅に半球状の照明が付き、写真館「R.KOHNO PHOTO STUDIO.KYOTO」のサインが入る。写真5-5、5-6はテーブル上の食器等が同じであるから同時期である。天井の半球状の照明は大正３年（1914）に改修された３階の格天井にも同じ照明が付く。また写真5-4と同じ写真館で撮影された支那室の写真（p.81写真18-6）は、室内が改修された大正６年（1917）頃より以降のものであることが分かっている。古写真からは、カーテンバランスの形状、天井隅の半球状の照明の有無等がみうけられるが、古写真を年代順に並べるのは今後の課題としたい。

家具はテーブルと椅子は新しく変わっているが、竣工アルバムにある隅の楕円卓子２点は残っていて、現在、客間において使用されている。１点（長29）は什器備品台帳に「第二二四号／小判形卓／食堂備品」とある国産品で、サクラと杉でできている。４本脚で、貫がX字に入っている。もう１点（長30）は什器備品台帳に「第二二五号／小判形一本足ノ卓／食堂備品」とある国産品でタモ材である。ネオ・バロックの様式であり、食堂の室内意匠にあわせている。天板裏面には当初と思われる「村井」「225」と、後世と思われる「54」のシールが貼られている。

室内は18世紀後半頃の古代回帰的なネオ・バロックの様式を主に用いていると思われる。18世紀前半のロココ様式の反動により、古代ギリシャを思わせる質実剛健さを求めている。19世紀に入るとナポレオン時代の様式となり、より堅い感じになるが、この部屋はやや優しい印象も受けることから、ロココ様式も反映された少し前の時代と思われる。どの角度からでも絵になる室内意匠である。

１階　書斎（Library）／書斎／書斎／現 LIBRARY BAR MADEIRA（写真6-1～11）

床は寄木張りである。

半円型の三連窓の出窓を設ける。三連窓の両側壁面には、曲線状の本棚を設ける。

共に上部に曲線の木製カーテンロッドを付け、木製ブラケットで固定する。

壁はプラスター仕上げで、壁上部のエンタブラチュアは持ち送りの形状である。一方、反対側の壁面は腰板に大きな欅材と思われる一枚板を使用している。

天井は高さ3519mmで、プラスター仕上げである。

照明について、天井のシャンデリアは後補のものである。当初の照明は、現在１階広間に付いており、竣工アルバムのものと一致する。ガラスシェードは朝顔型で、花弁が10弁でガラスが厚く表面に軽い凹凸を持ち、内面は平滑である。壁の照明は当初のもので、元の天井照明とランプシェードが同じ形状である。

暖炉は大理石を用いる。シンメトリーで、上段は中央に円を描き、柱は上部に曲線を用いてマントルシェルフを支える意匠とする。他の部屋にくらべて、落ち着いた意匠である。暖炉上部（オーバーマントル）は鏡をつける。鏡枠は、上部に花綱紋様

6-1「書斎」（竣工アルバム）

6-2 書斎エンタブラチュア

6-3 書斎（長楽館蔵）

6-4 書斎腰板壁

6-5 元書斎にあった照明（現在広間にある）

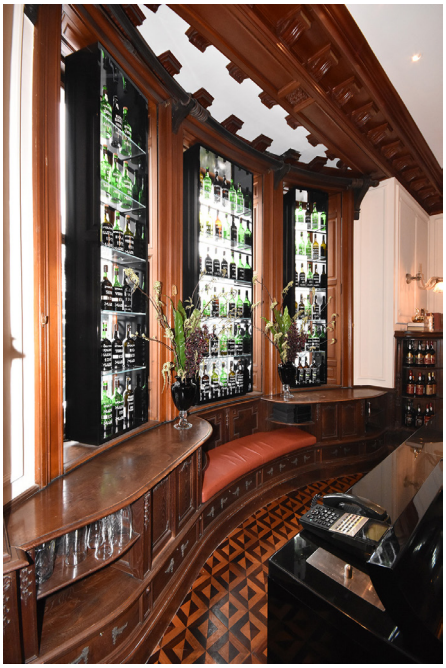
6-6 書斎壁面の照明

6-7書斎暖炉

6-8書斎暖炉と鏡

6-9書斎で用いられた書机

6-10書斎　備付の棚とソファ　拡大



6-11書斎　備付の棚とソファ

（フェストゥーン）と花輪で装飾されている。

竣工アルバムと比較すると、窓際中央に棚が設けられているのと、天井のシャンデリア以外は大きな変更はみられない。

書斎の家具について、竣工アルバムの書机（長32）が現在食堂で使用されている。８本脚で貫がない。天板は皮張り、脚部は垂直な溝彫、引出しに細やかな植物の彫刻を施したネオ・クラシック（ルイ16世）風である。「長楽館什器備品台帳」では「第二二六号　唐草彫甲皮張事務卓　書斎備品」に該当する。また、竣工アルバムの回転椅子（長13）も現在別の部屋で使用されている。肘掛部分と腰部に植物の彫刻と、脚部に溝彫がみられる。

１階　球戯室（Billiard Room）／球戯室／玉突室／現球戯の間（写真7-1～8）

１階より半地下の高さにあたる。

床は板張で、後世のものである。竣工アルバムでは絨毯と思われる。壁はペンキ塗。

柱は角を丸くした角柱を両側から方立で挟み込むようなデザインになっている。柱頭部には飾りが付く。

壁はプラスター仕上げで、竣工アルバムではタペストリーをかけているように見える。両扉の両側にはアルコーブを設ける。上部を半円形にして貝のモチーフを施す。

天井は応接室、花卉室と同様、輸入金属製打出天井板張りに白ペンキを塗ったものである。３室のなかでは最も華やかな文様が施されている。照明は後補のものである。

暖炉は、客間や応接室、書斎のような曲線は見られず、ボリューム感のあるシンプルなデザインである。１枚の継ぎ目なしの大理石を大胆に使用し、石材の自然の色やパターンを強調したものと思われる。「EDWIN A.JACKSON & BRO. NEWYORK.」の銘がある。

家具について、古写真にある家具はほぼ失われている。天井に付く照明の六灯式ペンダント（長43）は現在小屋裏に保管されているが、竣工アルバムの照明とは異なるため、後補のものである。

ステンドグラスは窓と広間との境の両開戸にある。窓のステンドグラスは、水辺の風景で帆持船や繋がれた和船など日本風のモチーフが入る。竣工アルバムではステンドグラスのない窓のように見え、昭和53年（1978）には花卉室の南側の増築部との境にあった（羽生1978）。当初の設置位置が不明であるが、風景の描き方が当初浴室にあった白鳥のステンドグラスや、支那室と広間との境にあるステンドグラスとよく似ており、ステンドグラスそのものは同時期のものと思われる。

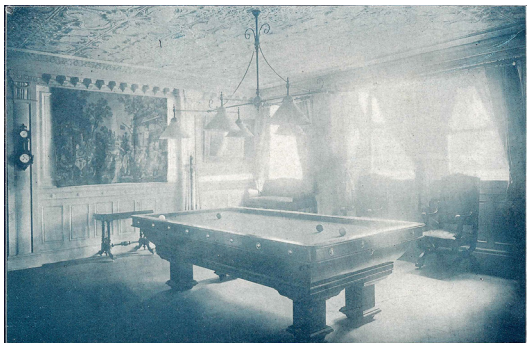
両開き戸のステンドグラスは、バラ様の花のモチーフが入る。こちらは、１階花卉室や１階便所（現男性便所）の花や葉の形、背景の表現がよく似ている。他の２点とは異なり、左右対称のデザインである。

１階　應接室（Reception Room）／應接室／應接室／現女性トイレ（写真8-1～6）

床は現代のタイル張りである。

壁は、細い直線でデザインを構成し、女性的で繊細な雰囲気をもつ意匠である。

窓にはヨットが描かれたステンドグラスが嵌められている（写真8-2）。竣工アルバ



7-1「球戯室」（竣工アルバム）

7-2 球戯室

7-3 球戯室柱頭部

7-4 球戯室アルコーブ

7-5 球戯室暖炉

7-7 球戯室窓のステンドグラス　入江風景

7-6 球戯室暖炉
「EDWIN A.JACKSON & BRO. NEWYORK.」の銘

7-8 球戯室両扉のステンドグラス　バラ図

ムから、当初は２階の西浴室にあったことがわかる。戸袋には、ゼツェッション風の装飾がみられる。

天井は輸入金属製打出天井板を張り、白ペンキを塗ったものである。この金属製打出天井板は、東京の建築資材輸入販売元であった藤原商店によるもので（工藤2014）、鉄板を型押ししたものである。明治40年代から昭和初めに流行した。当時は欧米でも最先端の技術であり、欧米でも日本でも流行っていた。シャンデリアは後補である（写真8-5）。

暖炉は、白亜大理石で中央にホタテ貝のような飾りを配し、シンメトリーにアカンサスの葉飾りが伸びる（写真8-6）。両側の柱上部にも貝とアカンサスがS字型に装飾され、全体に柔らかい曲線が垂れ、ネオ・ロココやアールヌーヴォーのようなデザインがみられる。火袋周囲の飾金物は幾何学模様が見られる。全体的に優雅で、室内で存在感をもつ暖炉である。

竣工アルバムに写る家具は現存しない。

応接室は、様々な時代のデザインが混ざっているが、室内全体では調和がよくとれている。

１階　――／旧便所・手洗／――／現男性トイレ（写真9-1～7）

床は後補のタイル張である。

壁はタイル張である（写真9-1）。緑と紺色で構成された帯状タイルは、竣工アルバムの東浴室の写真にもみられ当初材である。シンメトリーの文様は、アールヌーボー風にもみえる（野口1979）。

開口部の方立は、柱頂部に青いモディリオンが付く。

また、ルイ16世風の飾壺を中心にシンメトリーな唐草文様のタイルが帯状に貼られる（写真9-2）。目地がなく、付きつけにしているが、現代ではこのような施工はあまり見ないため当初のものと思われる。

壁面上部には、装飾金物を付ける。中央に忍冬（すいかずら）の文様を配し、シンメトリーにアカンサスの唐草をつけたルイ16世風のブロンズ鋳造である（写真9-3）。

天井は個室部分にはプラスター仕上げに青い額縁を入れている（写真9-4）。また個室の手前はアーチ天井を用いる。

入口の建具にはステンドグラスがはめられている（写真9-7）。バラと思われる植物がデザイン化されたものである。花卉室の壁や球戯室の建具に嵌ったステンドグラスとよく似たデザインである。ただし球戯室のような左右対称ではなく、大きな曲線の先に花が描かれ、その左右に花卉室と球戯室とよく似た葉が描かれる。一方で、下部にも葉のようなものが描かれ、こちらは大胆な曲線で、下部はトルコブルーの配色を用い、爽やかな印象を与えている。

また、洗面台の上部にもステンドグラスがあることがわかっている（羽生1978）。現在は手前に建具をつけているため確認できない。

２階　二階廣間（Upper Hall）／廣間／広間／現――（写真10-1～7）

２階広間は階段の構成を統一させ、連続性を持たせる。しかし、装飾部についてみると、１階は手摺子下に側桁が付いた古式であるのに対し、２階は側桁が付かない。18世紀のジョージア様式から側桁がなくなるため、これを意識していると思われ

8-1 応接室暖炉と鏡

8-2 応接室ステンドグラス

8-3 応接室古写真（内海氏蔵）暖炉と鏡

8-4 応接室戸袋のデザイン

8-5 応接室シャンデリア

8-6 応接室暖炉

9-1 シンメトリーの帯状タイル

9-2 飾壺と唐草文様のタイル

9-3 忍冬とアカンサスの装飾金物

9-4 青い縁のある天井

9-5 アーチ天井

9-6 開口部の枠

9-7 建具のステンドグラス

る。

床は後補で絨毯敷きである。壁と天井はプラスター仕上げ。階段廻りや暖炉周辺は当初のままと思われる。

暖炉は２階広間中央に位置する（写真10-5）。１階広間に良く似た形式で蛇紋岩を用いる。両側の柱は縦溝装飾が施され、１階広間が直線的であるのに対し、２階広間はＳ字曲線とする。火袋周囲の飾金物は上部が透金物、左右が浮彫装飾で、その技術は精巧である。１階はルネサンス風であったのに対し、やや柔らかい印象を与える。

照明について、暖炉両脇の壁灯（写真10-6）は、シェードやアームが１階の広間と同形である。２階に上がる手摺の親柱上の照明は、中央に花蕾型のシェードが付く（写真10-3左隅）。四方に伸びた枝の先に、更に小さい蕾型の電球が付く。

２階　貴婦人室（Boudoir）／夫人室／夫人室／現貴婦人の間（写真11-1～8）

床は後補で絨毯敷である。竣工アルバムでは、もとは板張りに絨毯を敷いたように見える（写真11-1）。

壁は額縁式の枠飾りを設け、上部より植物が垂れ下がるような華やかな装飾を付ける。

天井はシンメトリーで細やかな装飾が施される（写真11-4）。

照明についてシャンデリアは、竣工アルバムには写されていないが、支柱をみると当初のものと思われる（写真11-4）。アカンサスのような葉から棒状のガラスが垂れ下がるデザインである。

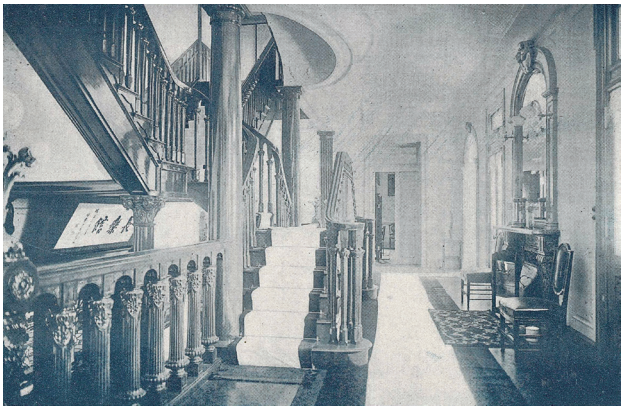
暖炉脇にある壁灯は、竣工アルバム（写真11-1）より当初と思われる（写真11-5）。シェードは細長いガラス棒を円形に吊るしてカバーしている。シャンデリアとも雰囲気がよく似る。支那室入口の照明ともよく似るが、夫人室の照明はガラス棒の上に球状、下に雫型のガラスが垂れ下がり、より優美である。

暖炉は西面にある（写真11-8）。白亜大理石を用い、暖炉上部に大鏡を嵌める。中央と左右に円形の飾りを配し、その中に花のモチーフを入れる。左右の柱について、上段は方形にし、下段上部は緩やかなS字曲線を描いたアカンサスの葉飾りを入れる。直線的な意匠でまとめる。食堂の暖炉に似るが、より曲線が緩く、落ち着いた雰囲気にまとめている。

暖炉上部の大鏡について、上部中央に盃形の鉢を配し、左右に花綱紋様（フェストゥーン）を用いる。また、南面の壁にも鏡が付く。旧鏡の上に新鏡を貼り付け、パテで固定されている。旧鏡とよく似た仕様としている。

南面東端の扉は竣工時には壁であった。竣工アルバムの「東客室」（p.74写真12-1）に写る壁は夫人室の南壁面に該当するが、タペストリーがかかるのみで扉がない。大正期の図面では扉が描かれているため、竣工時は壁で、大正期までに扉が付けられたことになる。

家具について、竣工アルバムの左の腰掛（ウィンドシート、長10）、右の肘掛椅子（ベルジェール、長12）、奥の窓手前の天板が大理石である花台（長33）、左壁脇の大理石の彫刻台（長38）は現存する。現在、ウィンドシートは客間、ベルジェールは新



10-1「二階廣間」（竣工アルバム）

10-2　２階広間（大正５～７年）（長楽館蔵）

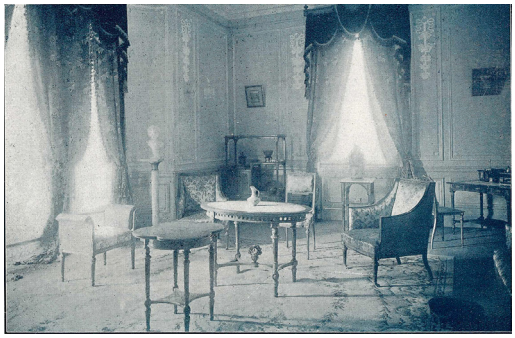
10-3　２階広間東をみる

10-4　２階広間暖炉と鏡

10-5　２階広間暖炉

10-6　２階広間暖炉脇の壁灯

10-7　２階広間階段手摺



11-1「貴婦人室」（竣工アルバム）

11-2夫人室（大正５～７年）（長楽館蔵）

11-3夫人室（長楽館蔵）

11-4夫人室天井とシャンデリア

11-5夫人室鏡脇の壁灯

11-6夫人室暖炉上の鏡上部

11-7夫人室壁灯（後補）

11-8夫人室暖炉

館、花台は２階広間等、彫刻台は玄関で使用している。全体にルイ16世風の家具でまとめている。

室内は装飾的で、浮彫りが浅く、シンメトリーであり、18世紀イギリスの新古典主義に似ている。ただ、シンプルな新古典主義に対して、ややフランスのロココ風が微妙な曲線などに加味されているようにもみえ、アメリカで折衷されたのかもしれない。

２階　東客室（Guest Room）／東寝室／東寝室／現接遇の間（写真12-1～6）

床は後補で絨毯張とする。竣工アルバムより元は板張に絨毯を敷いたように見える。

壁はピクチャーレールとチェアレールを入れ、布張である。竣工アルバムではピクチャーレールからタペストリーをかける（写真12-1）。夫人室で先述したように、北壁面には竣工後から大正期の間に建具が取り付けられる。建具枠が東壁の際までついて不自然であり、後補の建具である。建具枠の繰型のパターンは他と同じで、数年の差で設置していると思われる。西面の建具には、GHQに接収された時代と思われる薄い色のペンキが一部見える。

天井は高さ3596mmである。夫人室がややロココ風の新古典主義だったのに対し、中央に厚みがありバロック風にみえる。ただ、持ち送り部分にはそこまでの力感はない。

照明について、シャンデリアは竣工アルバムには映らないが、支柱の部分が旧客間などの当初材と同じ仕様なので当初とみて良いだろう（写真12-3）。シャンデリアは中央に１灯、周りに４灯吊るされ、シェードはラッパのような花の形で、球状のガラスをまとわせ、アームはガラスである。暖炉脇の壁灯も同じモチーフで１灯である（写真12-5）。

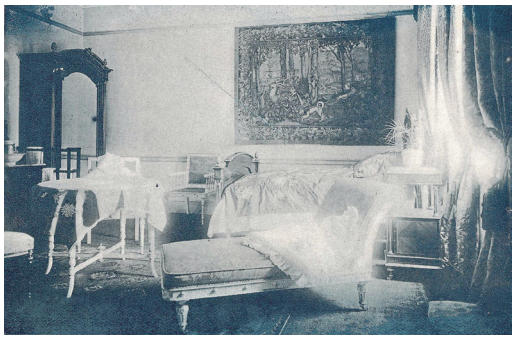
暖炉は全体に直線的であり、２段に区切り、上段は中央に枠飾りを配す（写真12-4）。左右の柱型は、上段は方形、下段上部はややS字を描いたモディリオンをつける。火袋周囲の飾金物は、左右上部に浮彫金物の枠を設け、枠内上方に鋳造透金物を施す。

暖炉上部に大鏡がつく（写真12-6）。大鏡の枠は２段にする。手前は左右に縦溝彫の装飾柱、上部に杯をモチーフとした木枠を付け、背面は天井に向かって左右に付柱が伸びる。付柱は上部にアカンサスの葉と花綱紋様（フェストゥーン）を用い、縦溝彫が施される。

家具について、竣工アルバム左の鏡付衣裳箪笥（長39）、右奥の寝台（長22）は現存する。鏡付衣裳箪笥はチーク材、方立に縦溝彫の装飾柱、上部に半円形の破風飾、中央に草花の古典装飾を備える。前面に大鏡を張り、上部隅には松笠形の彫刻をつける。木部には緻密な木象嵌が施される。寝台はチークと桜で解体して保管されている。いずれもルイ16世風でまとめる。またタオル掛（長48）も現存し、竣工アルバムの鏡付衣裳箪笥の手前にそれらしいものが写る。

２階　東浴室（Bath Room No.1）／浴室／――／現物置（写真13-1～3）

大正期の図面では「浴室」とあるが、西の浴室と区別するため、本稿では「東浴室」



12-1「東客室」（竣工アルバム）

12-2 東寝室

12-3 東寝室天井とシャンデリア

12-4 東寝室暖炉

12-5 東寝室壁灯

12-6 東寝室暖炉と大鏡

とする。

床は後補でタイル張である。壁も後補で、窓枠は当初と思われる。

天井は１階の球戯室、応接室、花卉室と同様、輸入金属製打出天井板張りに白ペンキを塗ったものである。

窓には白鳥を描いたステンドグラスが嵌まる。竣工アルバム「東浴室」の写真としてこのステンドグラスが見られるため、当初から同じ位置にあった。『建築工芸叢誌』第３冊には、「京都村井吉兵衛邸浴室の窓」としてこのステンドグラスが紹介されており、宇野澤製作所作成とされる。

２階　東南客室（Guest Room）／南寝室／南寝室／現トイレ（写真14-1～3）

床は後補でタイル張である。壁は横桟が入り、プラスター仕上げである。天井は落ち着いた中心飾で飾られる（写真14-3）。

照明について、シャンデリアは３灯式で、夫人室の壁灯と同じシェードで、細長いガラス棒を円形に吊るしてカバーしている（写真14-3）。夫人室のシャンデリアに比べてより落ち着いている。当初と思われる。壁灯は後補であろう。

暖炉は大理石である（写真14-2）。直線的でシンプルなデザインである。火袋周囲の飾金物は、左右上部に浮彫金物の枠を設け、枠内上方に鋳造透金物を施す。暖炉上部に大鏡を嵌める。鏡枠は東寝室のデザインとよく似るが、１段で簡素である。

全体に部屋の大きさにあわせてややおとなしく設えている。

現在は２室に分けて、トイレとして使用している。男性トイレ側の窓枠下部に、GHQによる接収の時代と思われるペンキが見られる。

家具について、竣工アルバムの鏡付化粧台（長44）は現存する。ブラジリアンローズ、「ＭＡＰＬＥ＆Ｃｏ　ＴＯＴＴＥＮＨＡＭ　COURTROAD LONDON」のプレートが付く。

２階　美術室（Museum）／北寝室／北寝室／現美術の間（写真15-1～6）

床は後補で絨毯張とする。

壁はピクチャーレールとチェアレールを入れ、布張である。

天井は高さ3847mmで壁から円形に小壁を設け、プラスター仕上げの鏡天井とする。

照明について、シャンデリアは竣工アルバムからはわからないが、支柱は当初のものである（写真15-3）。デザインは、上段は円錐形をなし下段は球状をなす。最下部にはペンダントをつける。壁灯は食堂の暖炉脇にある壁灯と同じデザインである（写真15-4）。２灯で、シェードはなく、カットガラスの数珠繋ぎタイプである。アームは優美な曲線のガラスである。

暖炉は大理石で、直線的でシンプルなデザインで、形は南寝室に似る（写真15-5）。ただし色が異なる。火袋周囲の飾金物は、左右上部に浮彫金物の枠を設け、枠内上方に鋳造透金物を施したもので東寝室と同じデザインである。

暖炉上部に大鏡を嵌める（写真15-6）。鏡枠上部中央には貝のモチーフを入れ、植物の装飾で左右を飾るが全体にはおとなしいデザインである。

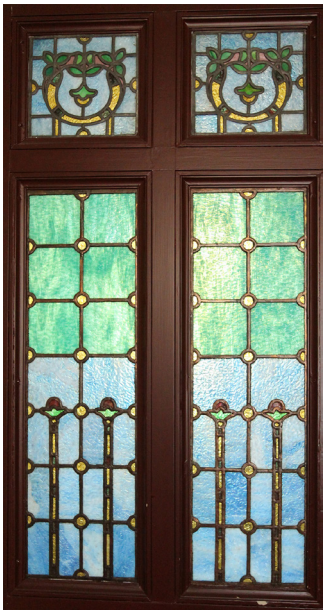
２階　西南客室（Guest Room）／西寝室／西寝室／現鳳凰の間（写真16-1～8）

13-1「東浴室」竣工アルバム

14-1「東南客室」（竣工アルバム）

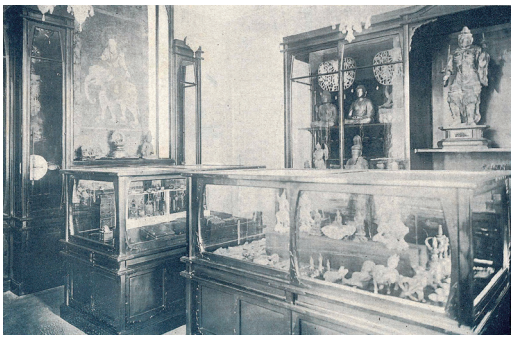
13-2 東浴室窓ステンドグラス

14-2 南寝室暖炉と鏡



13-3 東浴室建具ステンドグラス

14-3 南寝室天井とシャンデリア



15-1「美術室」（竣工アルバム）

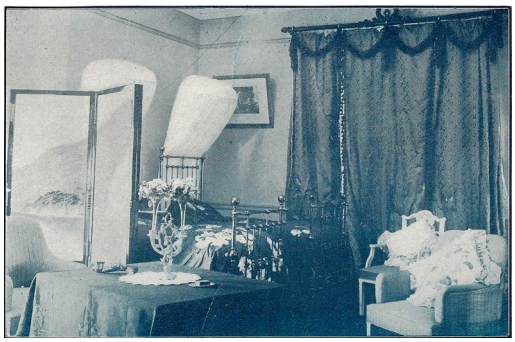
15-2北寝室（長楽館蔵）

15-3北寝室シャンデリア

15-4北寝室壁灯

15-5北寝室暖炉

15-6　北寝室暖炉と鏡


16-1「西南客室」（竣工アルバム）

16-2西寝室（大正５～７年）（長楽館蔵）

16-3西寝室西南をみる

16-4西寝室西北をみる

16-5西寝室天井とシャンデリア

16-6西寝室暖炉と大鏡

16-7西寝室暖炉

16-8西寝室カーテンロッド中央

２階で最も広い客室である。

床は後補で絨毯張とする。

壁はピクチャーレールとチェアレールを入れ、布張である。

天井は高さ3623mmで華やかなモールディングを施す。

照明について、シャンデリアは支柱から当初と思われる（写真16-5）。中央に半球状のガラスを配し、その周りに金輪を取り付け、金輪上部にレリーフ、金輪下部に棒ガラスを取り付ける。壁灯も当初と思われる。

暖炉は２階客室の中で最も立派である（写真16-6）。天板は左右の柱と中央の肘木で支える。肘木はそれぞれ縦溝彫を施す。左右の柱型は、上部に肘木、下部全体にS字を描いたモディリオンをつける。火袋周囲の飾金物は、左右上部に浮彫金物の枠を設け、枠内上方に鋳造透金物を施す。

暖炉上部に大鏡を嵌める。鏡枠は溝彫で上部中央に貝に似た華やかな飾りを配し、左右に花綱紋様（フェストゥーン）で飾る。

窓は三連窓の出窓がつく。カーテンロッドには縦溝彫が施され、中央にはアンピール様式で愛用された勝利の花環が付けられ、左右にリボン飾が伸びる（写真16-8）。カーテンロッドにかかる花綱装飾は組紐で極めて装飾的である。

西寝室には化粧室が付いており、現在は物置として使用している。化粧室内にある押入は大正期の図面では引違い建具の表記だが、現状ではカーテンレールの痕跡が確認できる。化粧室の建具には、見えにくい箇所に塗装のはがれが見られ、下層がよく分かる。何度か上にペンキを塗っていると思われる。

家具は現在、鏡付複式衣裳箪笥（長40）や鏡付洗面台（長45）が置かれる。。

西寝室は、竣工アルバムの他に「美人弾琴図」が飾られた古写真（長楽館蔵）がある（写真16-2）。「美人弾琴図」は亀井至一（しいち）が薫子（後の村井吉兵衛の後妻）をモデルにし、第３回内国勧業博覧会（明治23年〈1890〉）に出品した洋画である（東都文化交易1954、小野1968）。現在は株式会社歌舞伎座が所蔵する。したがって写真16-2は、先妻宇野子が亡くなった大正５年（1916）以降の撮影と考えられる。

２階　西浴室（BathRoomNO.2）／浴室／浴室／現物置（写真17-1～2）

大正期の図面では「浴室」とあるが、東

17-1「西浴室」（竣工アルバム）

17-2旧西浴室

の浴室と区別するため、本稿では「旧西浴室」とする。

床と壁は後補でタイル張である。天井はプラスター仕上げである。窓枠は当初からで、肘木がついて窓枠天板を支えるデザインである。竣工アルバムでは、床にモザイクのタイル張、壁面に帯状のタイルと窓にはヨットが描かれたステンドグラスが嵌り、バスタブと洗面台、鏡が写る。西寝室との境の建具も写るが、現在は塞がれている。ステンドグラスは現在１階旧応接室に移設されている。

２階　サービス用階段室

サービス用階段室の奥には小荷物専用のエレベーターが設置されている。

大正11年（1922）4月20日付のエレベーター注文請書（内海氏蔵）が確認されている。この前年の大正10年（1921）１月４日に、村井吉兵衛は左足の切断手術をしている（村井1935）ことから、元々は人用のエレベーターが設置されていたのではないかと思われる。

２階　喫烟室（Smorking Room）／支那室／支那室／現喫煙の間（写真18-1～12）

中２階の高さに位置する。

床は竣工アルバムより当初のタイル張である。

壁は、現在上部に中国風の壁画がある。扉の上部に「秋濤」と落款があることから、田畑秋濤（1879～1964）と思われる。竣工アルバムでは壁画はなく、タペストリーがかかるのみであるため、田畑秋濤の絵は竣工後に描かれたものである。

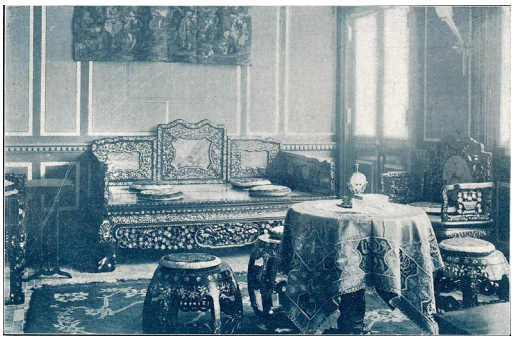
天井は高さ3451mmで現在白塗である。『岳陽長尾健吉』（長尾1936）によれば、大正６年（1917）に「支那特色の紫檀細工の家具装飾を用ひて支那室を作りたいと云ふ事で、グレック式か何かであった第二応接間を改装することになり」、「長方形の四角な洋室を支那風にするので形を更へるわけには行かず、先ず天井に支那風の絵でも画く外なく、支那特色の龍に鳳凰でもあしらった絵を画くことにし」、大正７年（1918）４月中旬頃に上野廣一の天井画を貼り付けたとある。一方写真18-４の写真は、裏面に「大正六年四月京都円山長楽館支那室装飾記念」と記載があり[2)]、一年の違いがあるが、『岳陽長尾健吉』は昭和11年（1936）の刊行であるため、写真裏書の方が信憑性が高く、大正６年（1917）に天井画が完成したと思われる。

また写真18-2は、大正５年（1916）以降に撮影された写真16-2と共に写真館に保管されていたものである。写真18-4と比較すると、壁面の改修前であるため、大正５～７年に撮影されたものと思われる。

照明について、現在の照明は後補のものである。写真18-4の天井照明は、３階格天井に現在付いている様式と同じである。また写真18-6には、中国風の照明が天井から吊るされている。写真18-5（大正９年〈1920〉）も同じ中国風照明の底部が写っているように見える。

以上のことから、大正６年頃に龍の天井画を貼り付け、その後、大正９年までの間に、半球状の天井照明から中国風の照明に変更したと考えられる。

暖炉は天板下部にデンティル（歯飾）をつけ、火袋の周囲は雷紋のような紋様、小さな飾柱の柱頭に天馬、両隅の飾柱の柱頭



18-1「喫烟室」（竣工アルバム）

18-2支那室（大正５～７年）（長楽館蔵）

18-3グラヒック（明治42年〈1909〉）

18-4大正６年(1917)の写真
（たばこと塩の博物館蔵）

18-5「大正九年五月　京都長楽館ニテ撮影
米人イデス　ホワイト、テイカー」(1920)
（内海氏蔵）

18-6改装後の支那室（年代不明）（内海氏蔵）

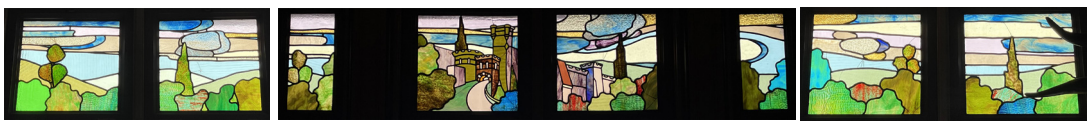
18-7支那室西面（長楽館蔵）

18-8両扉のステンドグラス

18-9支那室東面

18-10暖炉

18-11田畑秋濤の絵



18-12窓のステンドグラス

は渦巻などユニークなデザインである（写真18-10）。

家具について、長椅子（長21）、彫刻台（長37）は現存する。長椅子は螺鈿を施した中国製で現在もこの部屋に置かれる。彫刻台はねじり溝柱形で、御影石でできる。写真18-6に写るが、現在は１階広間に置かれる。

竣工時の部屋は、螺鈿の長椅子など中国風のもの、シャンデリアやステンドグラスなど欧風のもの、床タイルのイスラム風のものなど、様々な様式が混ざった部屋だったのであろう。大正６年頃に中国風の天井画や壁の水墨画を付け、壁全体にも雷紋を施すことで中国風に統一された。

２階　露臺（The North Veranda）／露臺／露臺／現――（写真19-1～4）

支那室の北側の露台である。床のタイルは後補である。柱はコンポジット式オーダーで一石のみを大胆に用い迫力がある。外観は上階にある残月の間の半月窓をとりこんだ景色とする。手すりの数カ所にフラワースタンドを配している。竣工アルバムに写る家具は現存しない。

２階　開廊（The South Veranda）／縁側／――／現――（写真20-1～4）

床タイルは昭和に改変されていたが、平成に上層の後補タイルをはがし、一部補修を行い、旧来の状態にもどしている。柱は屋外側に円柱を立てる。壁面は腰部を後補のタイル張り、上部をプラスター仕上げとする。もとは屋外空間であったが、後に壁とガラスを取り付ける。天井はプラスター仕上げで、照明は後補である。竣工アルバムに写る家具は現存しない。

３階（写真21-1～5）

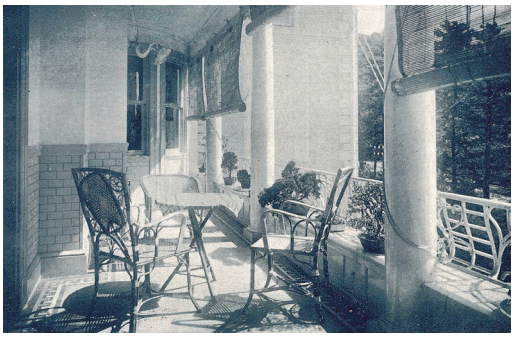
清水組京都支店による工事経歴書には、大正３年（1914）１月10日より同年12月31日まで、「村井別邸三階洋館改造工事木造」とある。また、『建築工芸叢誌』第２期第14冊の「村井別荘長楽館の改造」では、「三階の改造を思立ち」、外部の設計をガーディナー、内部の設計を大島盈株に依頼し、清水組が工事をしたとある。

さらに、竣工アルバムの「表門」（写真21-1）を見ると、正面３階部分は階高が低く、３階窓や屋根の形状が現在と異なる。正面側（東側）に天井の低い部屋があったところを、大正３年に３室を設けて階高を高くし、屋根の形状を変えたと思われる。

階段室の写る竣工アルバム「三階 Third Floor」（写真21-3）を見ると、階段を上がった踊り場正面に引違いの襖戸と壁が映る。現状では奥に南北の廊下があり、さらに奥に上段之間や次之間が並んでいることから、現状と写真の違いを確認できる。このほかの竣工アルバムに掲載された３階と４階のキャプションが付く部屋は、改修されているとみられ、現位置を確認できていない。

現在の３階の平面は、東端に北から上段之間（十一帖）、次之間（十五帖）、控室（八帖半）、化粧室（四帖半）が並ぶ。上段之間の西には控室（七帖）が、化粧室の西には浴室と便所が付く。さらに廊下をはさんで、南側には東から中座敷（十一帖）、次之間（十二帖半）が続き、階段を３段程上がったところに、西座敷（八帖）、次之間（七帖半）が並ぶ。北西角には女中和室があ

19-1「露臺」（竣工アルバム）



20-1「開廊」（竣工アルバム）

19-2 露台東をみる

20-2 開廊（大正５～７年）（長楽館蔵）

19-3 フラワースタンド

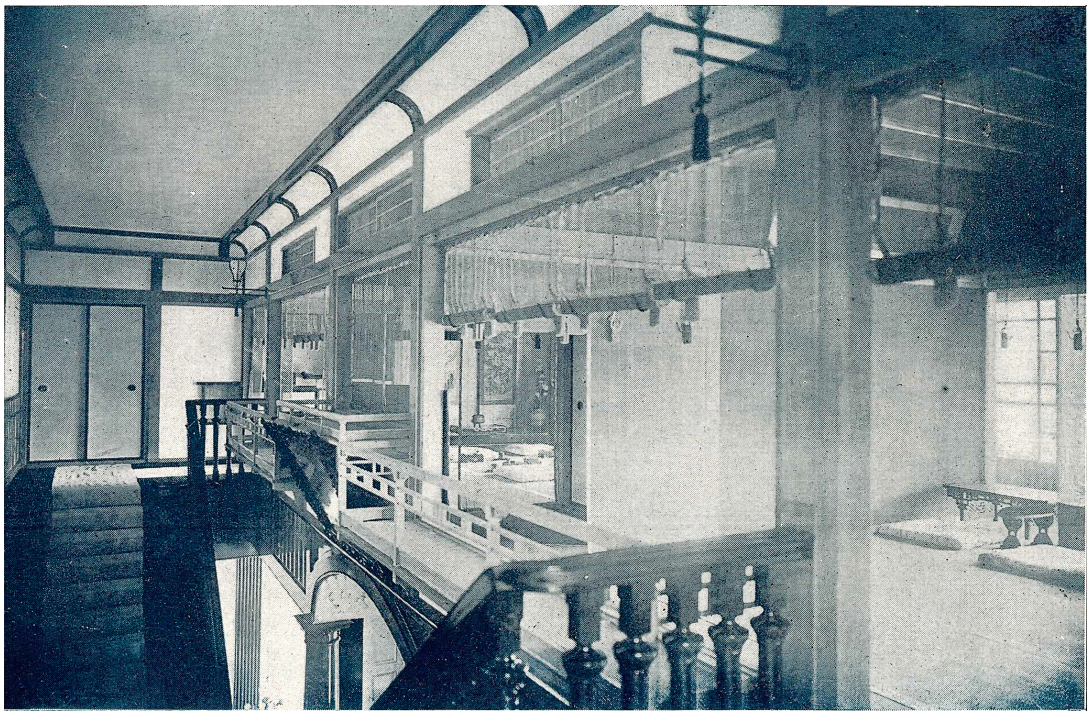
19-4 露台開口部

20-3 縁側東をみる

20-4 縁側西をみる

21-1「表門」（竣工アルバム）

21-2外観（長楽館蔵）

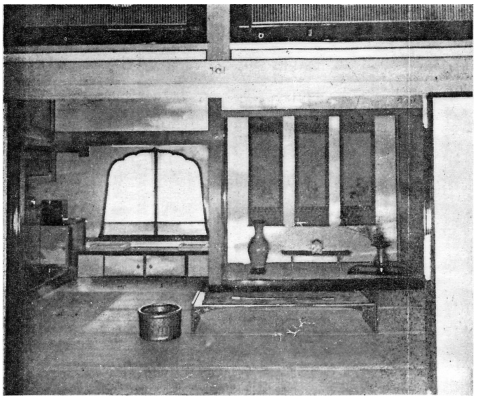


21-3「三階」（竣工アルバム）

21-4 ３階階段廻り東をみる

21-5 ３階階段廻り古写真（長楽館蔵）

21-6上段之間の古写真（長楽館蔵）
テーブルと椅子がある



21-7上段之間の古写真
（『有鄰第三館　第四回懐恩記念』より転載）

21-8上段之間の現状の写真

21-9天袋

21-10引手金物

21-11 違棚

21-12釘隠

るが、一時は厨房として利用され、現在は物置となっている。また北側中央には、２階と３階の間の高さに、茶室（十帖）がある。

３階　――／上段之間（十一帖）／――／現御成の間　及び次の間（写真21-6～12）

上段之間と次之間は襖と筬欄間で隔てられる。いずれも畳敷である。古写真ではテーブルと椅子が置かれた時期もあったようだ（写真21-6）。

壁は障壁画を貼る。長押を廻し、蟻壁を設ける。

天井は高さ3296mmで、２室とも折上格天井で、青地に金雲を描く。天井には食堂の四隅と同じ照明が付く。

正面には床の間、向かって左側には花頭窓と地袋、かね折れにして違棚と天袋を設ける。右側には付書院を設ける。床の間は貼付壁で黒漆の框を置き、畳を敷く。床柱は四方柾で、巻裏挽（まきうらさば）きにし、釘隠を付ける。

次之間の床は、貼付壁で地板を置き、地袋を設ける。床柱は四方柾で、巻裏挽きにし、釘隠を付ける。

室内の障壁画について、上段之間の垂れ壁と、付書院上部には千鳥が描かれる。違棚の天袋は淡路島、上段之間の襖下方には波が描かれる。全体を金砂子で散らし、「淡路島かよう千鳥を」現わしている（橋本1930）。次之間には野毛（のげ）や切箔、砂子をまき、雲と波紋が描かれる。

また、釘隠、引手金物、違棚や天袋の金物、格天井の金物などには、村井家の家紋「三柏」が入る。

３階　座敷（Drawing Room）／中座敷（十一帖）／――／現聚楽及び　――／次之間（十二帖半）／――／現平安（写真22-1～5）

十一帖半の畳敷きで、西面に床の間を設ける（写真21-3）。床框を黒漆とし、床畳を敷き、付書院を設ける。床脇には地袋を設ける。地袋の障壁画は「文嶺」の落款より、前川文嶺（1837～1917）によるものとわかる。

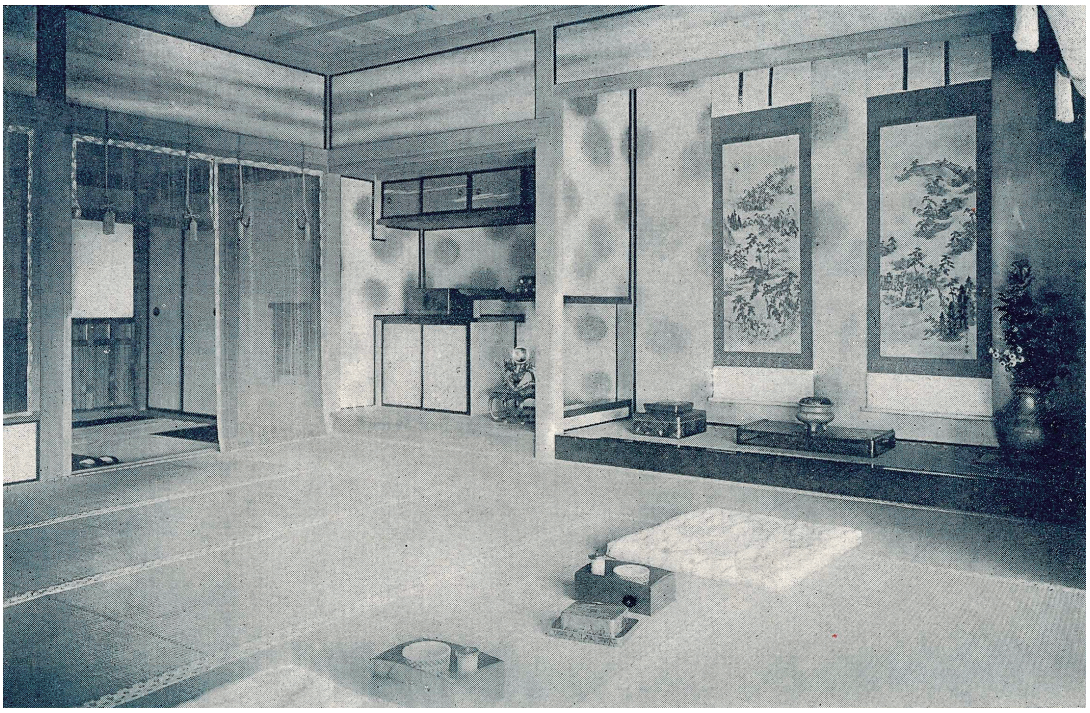
東面は４枚の襖を設け、上段之間の前廊下に接続する。

壁は土壁で、天井は高さ2623mmで棹縁天井とする。

竣工アルバム「座敷」（写真22-1）や「三階」（写真21-3）には中座敷の東面が写されており、もとは東面に床の間を設けていたことが分かる。床の間は間口を広くとり、黒框に畳を置き、床脇には違棚、天袋、地袋を設けている。左奥は、現在の階段を上がった踊り場にあたり、写真22-1では引違いの戸が映る。この引違いの襖戸が、階段を上がった踊り場の東面にあたる。

床の間の配置が大きく異なることから、上段之間が造作された大正３年（1914）にあわせてこの部屋も現状のように改修されたと思われる。柱等に改修の痕跡がみられないことから、柱を全て取り替えた、大胆な改修だったことが伺える。

また西に隣接する次之間（十二帖半）について、大正期の図面では付書院がない。現状の南廊下にある扉と付書院が不自然な取り付け方をしているため、この付書院は後補のものと思われる。南廊下には腰掛が備わっていて、大谷祖廟の参道を見下ろす



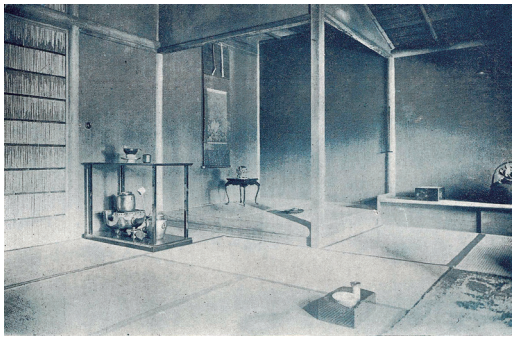
22-1「座敷」（竣工アルバム）

22-2 中座敷東をみる

22-3 中座敷西面の床

22-4 中座敷前川文嶺の地袋

22-5 中座敷次之間の床



23-1「茶室（残月の間）」（竣工アルバム）

23-2茶室西をみる

23-3茶室北西をみる

23-4茶室北面

23-5西のステンドグラス（桜）

23-6東のステンドグラス（紅葉）

ことができる。

３階　茶室（残月の間）（The Ceremony Room）／茶室（十帖）／――／現長楽庵（写真23-1～6）

中３階の高さに位置する。表千家「残月亭」の写しである。

南西隅に床を設け、西面に床脇を設ける。

床は畳敷であるが、壁は土壁とし、西面に開口部を設けない。

床天井は竹を組んだ格天井とする。床脇の天井は化粧垂木であるが、残月亭に比べて垂木の間隔をあけ、よりシンプルに仕上げている。

開口部は、北面中央に半円形の窓が開き、その両側である東西にステンドグラスの円窓が嵌まる。茶室東側には水屋が付くが、東のステンドグラスは水屋北面に位置する。

ステンドグラスのモチーフは西が桜、東が紅葉である。『建築工芸叢誌』第３冊にこのステンドグラスが掲載されており、竣工時からあることが分かる。

茶室でありながら、数寄屋の要素を強調させず、一方で半円形の窓やステンドグラスを嵌めるなど、洋館である建物のなかに茶室をうまく組み込ませている。

３階　――／女中和室／――／現物置

平面の北西隅に位置する。大正期の図面では女中和室とある。その後、一時期は厨房として利用された。現在は物置となっている。間取りは変わらないが、床、壁、天井など全て後補のものである。

３階　四階客室ヵ／西座敷／――／現休憩室　及び次の間（写真24-1～3）

平面の南西に位置する。上段之間や、中座敷、女中和室に対して、階段を３段ほど設けて床を高くする。天井は高さ2208mmである。竣工アルバムでは、「四階客室」（写真24-1）があるが、この部屋に該当する可能性もある。

現在は和室で、東面に床を設ける。西側には次之間（７帖半）が付く。南面には縁が付く。大正期の図面と配置がほぼ同じであるが、西端にあった押入に変更が見られる。

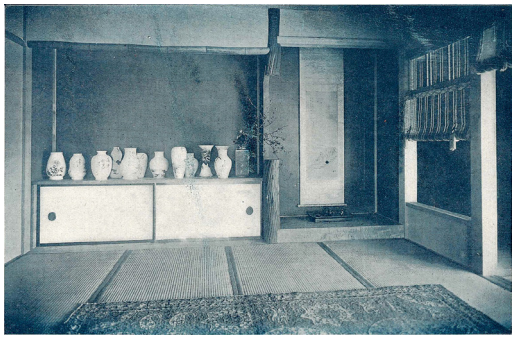
大正期の図面では次之間の北側に浴室と便所があり、竣工アルバムの「四階浴室」に該当する可能性があるが、現在は改装されて事務室となっている。

４階　――／物置／――／現物置（写真25-1～2）

北面中央、茶室の上に位置する。物置が３室並ぶ。床は畳敷、内壁は板壁を貼り付け、建具は横桟の引戸を嵌める。物置前の廊下は後補の絨毯を敷く。廊下上部より、小屋裏へ上がることができる。

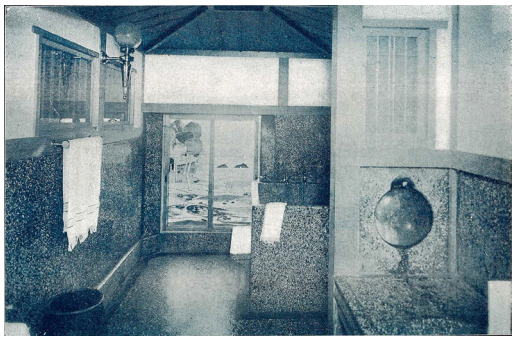
地下　階下室／――／――／現厨房廊下　厨房／厨房／――／現厨房（写真26-1～3）

地下室は、地形上、１階平面の西半分に作られる。東半分は基礎に当たる。大正期の図面と比較して、構造上の改変はない。室内に内壁を設け、新しい設備を入れるなどして、現在も厨房として活用している。



24-1「四階客室」（竣工アルバム）

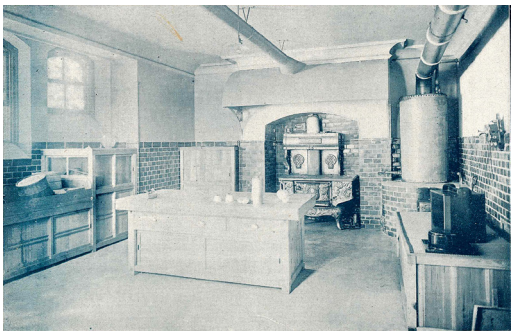
24-2 現休憩室東面



24-3「四階浴室」（竣工アルバム）

25-1 右手に物置が並ぶ

25-2 物置内部



26-1「厨房」（竣工アルバム）

26-2「階下室」（竣工アルバム）

26-3 地下

4　まとめ

長楽館の各部屋について、竣工アルバムとの比較や、現在の残存状況を見てきた。長楽館は村井銀行の閉鎖や、GHQによる接収後、荒廃した時期もあった。壁や天井の塗り直しなどの後補のものも見られるが、ヒアリング調査では、近年の所有者が飲食店などを経営しながら、少しずつ修復をすることで公開できる部屋を増やし、また古写真をもとに復元を試み、大切に保存・活用しようとしてきたことがうかがえた。

実際に、床のタイルや寄木張り、柱や天井周りに見られる彫刻や、暖炉、照明などの保存状態が良く、当時の設計者が各々の部屋に特徴を持たせ、当時の流行を取り入れて設えたことがよくわかる。また、家具も部屋の特徴に合わせて、同じ様式のものを数多く揃えた。

さらに、竣工アルバムが遺されていることや、竣工時や改装時の様子がわかる記事や書籍が残っており、社会的にも大変注目された建物であったことが分かる。長楽館は、近代の技術を集結させた建物であることに加え、日本の近代実業家を取り巻く背景を示す資料としても大変貴重である。

謝辞

長楽館に関する貴重な資料を惜しみなくご提供下さった内海愛子様、川田恭子様、家具についてご教示いただきました小泉和子様、資料調査でご協力いただいた前田尚武様、現地での調査をさせていただきました株式会社長楽館、現地での実査にご協力いただきました石田潤一郎先生に感謝申し上げます。

千木良礼子（ちぎらいこ）（文化財保護課　文化財保護技師（建造物担当））

註

1）京都府立京都学・歴彩館所蔵
2）たばこと塩の博物館　青木然氏より御教示頂く。

参考文献

有楽社（1909.7）『グラヒック』第１巻第13号p.15
有楽社（1909.8）『グラヒック』第１巻第14号pp.14-15
建築工芸協会（1912.5）「スティンド硝子」『建築工芸叢誌』第３冊p.29
建築工芸協会（1915.8）「村井別荘長楽館の改造」『建築工芸叢誌』第２期　第14冊p.40（合本p.506）
京都府（1917）『大正大禮京都府記事庶務之部　上』pp.367-374
橋本八重三（1930）『植木屋の裏おもて』pp.139-145
村井薫子（1935）「一七、感謝の思ひ出」

大谷彬亮『医者大谷周庵』pp.50-56

長尾一平（1936）『岳陽長尾健吉』p.7.8.27

直木友次良（1937）『高木背水傳』大肥前社p.97

藤井斉成会（193-）『有鄰第三館　第四回懐恩記念』

熊川千代喜（1939）『藤井善助伝　続編』pp.104-116

市島春城（1941）『回顧録』中央公論社pp.107-108

東都文化交易（1954）『近代日本美術全集第３巻』p.12

大渓元千代（1964）『たばこ王・村井吉兵衛―たばこ民営の実態』（株）世界文庫

小野忠重（1968）『江戸の洋画家』p.172

野口茂（1978）「明治のロマンが息づく京都「長楽館」」『ホームデコレーション’78 SPRING第17号』トーソー出版（株）

羽生正気（1978）「明治のロマンが息づく京都「長楽館」Ⅲステンドグラス」『ホームデコレーション’78 AUTUMN 第19号』トーソー出版（株）

野口茂（1978）「明治のロマンが息づく京都・長楽館　暖炉と家具」『ホームデコレーション’78WINTER 第20号』トーソー出版（株）

野口茂（1979）「明治のロマンが息づく京都・長楽館　照明と壁画」『ホームデコレーション’79 SPRING 第21号』トーソー出版（株）

松本誠一（1982）「高木背水をめぐる人々」『佐賀県立博物館館報No.57』

京都市文化観光局文化観光部文化財保護課（1987）『京都市の文化財―京都市指定・登録文化財第四集―』

松波秀子（1996）「宣教師・教育者・建築家としてJ.McD.ガーディナー」『住宅建築』７月号

藤森昭信（2002）『歴史遺産日本の洋館　第２巻　明治編2』講談社

小田部雄次（2004）『家宝の行方　美術品が語る名家の明治・大正・昭和』（株）小学館

金田美世（2011）「J.M.ガーディナー作品における木内真太郎のステンドグラス」『日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』

工藤卓（2014）「福岡県大川市旧三潴銀行の建築資材と意匠の保存研究(2)輸入金属製打出天井板と室内意匠設計者をめぐって」『デザイン学研究』（一社）日本デザイン学会

たばこと塩の博物館（2020）『明治のたばこ王　村井吉兵衛』

長楽館（2010-2019）『長樂未央』Vol.10-35

長楽館（2021）『Regalo』Vol.14-15

堀勇良（2021）『日本近代建築人名総覧』中央公論新社p.330

郡山市美術館（2022）『記録する眼　豊穣の時代　明治の画家亀井至一、竹二郎兄弟をめぐる人々』